広島大学　大学教育研究センター
大学論集　第14集（1985）：249－269

19世紀末アメリカにおける大学拡張の諸相

小　池　源　吾

目　次

はじめに
1．大学拡張運動の系譜（その1）
2．大学拡張運動の系譜（その2）
3．大学拡張運動の系譜（その3）
4．大学拡張教育の様態

19世紀末アメリカにおける大学拡張の諸相

小　池　源　吾*

はじめに

J．H．ランドール（John H. Randall）によると，知的革命は概して類似したパターンをとり，とくにその当初には3種の異なる動勢がみられる。[1] まず新しい思想の熱烈な賛同者の群が出現する。しかし彼らが新思想に熱狂的な支持を表明するほどに，古い思想や伝統の擁護者たちは批判勢力を結集することになる。これら両者間での激烈な闘いがやがて沈静化する段になって台頭してくるグループを調整者（adjusters）と呼ぶ。このグループは，新思想をなじみの伝統的観念で解釈し，古いなじみの思想を新しい方法で確認しようとする，いうなれば新旧両思想を調停する役を演じる。

ところでランドールが提示した知的革命の構図は，アメリカ合衆国におけるイギリス大学拡張の導入過程を考察する際にも，有益な示唆を与えてくれる。すなわち1880年代後半にイギリスから紹介された大学拡張に対して，当時のアメリカ人が示したじつにさまざまな対応のしかたは，およそ上記の3グループに類別することができるからである。

しかし従来のアメリカ大学拡張研究では，1890年代は，ともすれば等閑に付されるか，せいぜいいくつかのエポックを拾い上げ，脈絡を欠いたままに祖述されるのが通例であった。それだけにランドールのいう新思想に相当する外国文化の受容と変容という視点から，あらためて19世紀大学拡張を照射してみる意義は大きいと判断される。その場合，大学拡張の本質からしてこの新奇なスキームにアメリカ大学がいかに対応したたが，課題の中核に据えられなければならない。そこで本稿では，新大陸にひとたび移入された大学拡張が，運動として進展をみる過程を3つの系譜に整理した上で，それぞれの系譜を辿りながら，大学側の姿態によって大学拡張の性格がいかに規定されていったかを考察しようとしている。

I　大学拡張運動の系譜（その1）

あらゆる運動がそうであるように，19世紀末のアメリカ大学拡張運動にしても，けっして平板な一枚岩の上で進展をみたわけではない。この期の大学拡張運動を詳細に検討してみると，それは概ね3つの系譜が織り合わさって展開された事実に注目する必要があろう。これら3系譜についていうと，展開の過程においてなにがしの人的な交流は相互にあったにせよ，それぞれは起点を異にし，したがって帰結したところもまたたがいに相違していた。

第一の系譜は，1887年9月にサザンドアイランドで開催されたアメリカ図書館協会年次大会において，H．B．アダムス（Herbert B. Adams）が行った講演を端緒とする。[2] 周知のごとくアダムスは，ジョンズ・ホプキンズ大学の歴史学教授で，ランケに代表されるドイツの科学的学問研究を合衆国に導入す

* 福岡大学人文学部助教授（大学教育研究センター客員研究員）

るとともに，アメリカ歴史学協会を創設するなど，斯界の指導的地位にあった。席上，アダムスは,「大学拡張」の名辞を冠した「民衆のための高等教育運動」[3] を，参政権の拡大になぞらえて「新しい形のヒューマニズム」[4] と称揚する。講義，その後にもたれるクラス（Class）講義要目，課題論文，最終試験，修了証書からなる拡張講義コースのユニットおよび運営と，イギリス大学拡張を概説した後に，彼は，大学拡張の利点を(1)娯楽を目的とした安価なバラエティー・ショーでしかない旧来のライシャムコースかわって，特定科目に関する系統的，継続的な学習を保障する，(2)大学が所在しない地方都市にも高等教育をもたらす，(3)学校，カレッジ，図書館，博物館等地域内の各種教育機関の活動を補強する，の3点に要約して，合衆国での実施を高唱している。[5]

折しも合衆国における公共図書館は質量の両面でめざましい発展期にあった。すなわち1876年のアメリカ図書館協会結成，また1881年からは，A．カーネギー（Andrew Carnegie）によって図書館建設のための資金援助が開始されている。ちなみにこの資金援助は，以後36年間にわたって行われ，援助金の総額は4,100万ドルにおよぶことになる。[6] さらに1887年は，後述するM．デューイ（Melvil Dewey）がコロンビア大学に図書館学校を創設し，自ら考案した十進分類法に基づいて，図書館司書の養成に着手した年でもある。学習室と専門的な訓練をうけた司書を擁する公共図書館の出現は，アダムスがかねてより企図していた民衆教育の変革を実現する上で，格好の足場を与えた。すなわちハイデルベルク大学留学の体験からドイツ流ゼミナールの効用を確信した彼は，ゼミナール・メソッドを大衆化するための（popularize seminary method）[7] 方途を，イギリスに起源をもつ拡張講義システムに求め,[8] かつそうした企図を合衆国で具体化する拠点を公共図書館に見出したのである。チュートン起源説の熱心な信奉者として知られるアダムスにしてみれば，奇しくもここに，ドイツ，イギリスと自国の歴史的所産が有機的な統合をみる。アダムスがあえてアメリカ図書館協会年次大会でイギリス大学拡張の導入をくりかえし唱導した理由は，こうした事情による。[9]

アダムスの趣意にまず呼応した図書館関係者としては，バッファロー図書館長J.N．ラーニド(Josephus Nelson Larned)．セントルイス図書館司書F．M．クランデン（C．F．Crunden），そしてM．デューイが挙げられるだろう。かくして合衆国の大学拡張は，公共図書館において先鞭をつけられる。たとえばバッファロー公共図書館の場合，早くも1887年の冬にコースを開設する旨をアダムスに伝え，講師の斡旋を依頼している。アダムスが指名したのは，ジョンズ・ポプキンズの大学院を修了したもののいまだ就職に恵まれないでいた，門下生のE．ベミス（Edward Webster Bemis）であった。「現時下の経済問題」と題するベミスのコース[10] は，週1回3か月に渡って行われ，各回は夜8時から1時間の講義とその後1時間のクラス討議で構成されていた。受講生は，婦人が約半数を占めていたが「かってなかったほどに市内の多様な人びと」[11] 250人からなり,そのうち200人がひき続きクラスに参加している。わけてもクラスでは受講生ひとりの質疑の時間を5分間に制限せざるをえなかったほどに活発な質疑が交されたことが報告されている。[12] この実験スキームの成功は，ラーニドをして「大学拡張という名称の下で，著しい成果をおさめつつあるイギリスのそれに類似した民衆教育運動を，合衆国に導入し実施するのに，公共図書館ほどに適した機関はない」と公言せしめた。[13]

翌冬バッファロー公共図書館では，ハーバード大学卒業生E．C．ラント（Edward C．Lunt）によって「アメリカ政治史」のコースが開講されている。この場合にも，初年度と同じく，拡張講義コースの6要素のうち課題論文，最終試験，修了証書はやはり欠落したままであった。他方，ベミスは，バ

ッファローで盛況を博したコースを，1888年の冬には監督派のマックィリー（H. Mac Queary）牧師の要請でオハイオ州キャントンで，さらには，すでにこの時点ではバンダービルト大学に職を得ていたためテネシー州ナッシュビルから318マイルの旅程にもかかわらず，セントルイス公共図書館においても担当している。

デューイもまた，アダムスに触発されるところが大であった。[14] しかし，大学拡張には共鳴したものの，その実施形態について，デューイは，明らかに異なる反応をした。そもそもデューイは，閲覧室を兼備した参考図書館，貸出し図書館，科学博物館，歴史・美術博物館の4機能がギリシャ十字架のごとく統合され，しかも階上には大小の学習室を具有した多目的施設として，公共図書館像を描いていた。[15] いってみれば公共図書館は，地域社会内の総合的な文化・学習センターにほかならなかった。だからこそ彼もまた，公共図書館を大学拡張の礎石とみなした。だが，それがアダムスのいう民衆大学（people's university）[16] となるには，大学との密接な関係が不可欠の前提であることを，デューイは看取していた。[17]

この点からみて，1888年12月にニューヨーク州教育行政の中枢機構に参画できたことは，デューイにとって二重の意味で千載一遇の好機であったにちがいない。その理由の第一は，ニューヨーク州に独特の高等教育制度に由来する。すなわちニューヨーク州では1784年に，公私立を問わず州内の高等教育機関はニューヨーク州大学制度（the University of the State of New York）に包摂された。A. ハミルトン（Alexander Hamilton）の思想を反映して確立された特異な行政機構は，あたかも「州」とその連合体である「合衆国」の関係に似ている。この包括的な制度を管理するのが理事会（the Board of Regents）であった。

理事会は，州内の高等教育機関に対して，チャーターをはじめとする主要事項の一切を統轄する。加うるに1865年以来，イギリスの地方試験制度に擬される試験制度が着実に実効を上げつつあった。[18] したがって理事会が率先して調整の任に就きさえすれば，州内の高等教育機関が有する人的，物的資源を適切にして容易に拡張事業に動員することができると彼は予見した。[19]

理由の第二は，州立図書館長を兼務するかたちでデューイが着任した事務局長（Secretary）という役職の権能にかかわる。元来，事務局長は，理事会を補佐する役職とみなされてきた。しかし1889年の教育行政改革を機に，理事会の権限が大幅に拡大するに伴って，事務局長の権能もまた，理事会の下で州内の教育を全体的に監督するそれへと強化されている。[20] もとより創意と熱情を嘱望されたデューイであってみれば，一連の野心的な教育改革を遂行するにきわめて有利な地点に位置していた。

オーバニーに赴任してわずか1か月後，早くもデューイは，理事会に大学拡張の実施を提案している。その数か月後，今度は州内の大学関係者を前に，彼は大学拡張について力説する。民衆は教育機会の拡大を希求しているにもかかわらず，彼らのすべてを既存の高等教育機関が収容することは，物理的にみて不可能である。こうした現実に照らして，民衆に大学をもたらすための措置を講じることが急務である，と彼は大学拡張の必要性を主張した。[21]

その後の経過を概観してみると，1889年に入って，理事会は大学拡張準備委員会を設置している。同委員会が策定した草案は，改年して1月に，理事会によって承認される。また，それまで懸案事項であった大学拡張予算に関しては，1891年4月に，1万ドルの特別補助金が，州知事D. H. ヒル（Daniel B. Hill）の署名でもって可決をみている。[22] ここにいたるには，デューイのあくことない説得工作と，

州内教師たちによる支援運動の2つに負うところが大であった。他方，草案作成の段階で大学拡張を視察するために一度訪英を果たしたデューイであったが，いよいよ事態が進展をみせはじめるにおよんで，1891年の夏に彼は再度大西洋を渡った。そこには，拙速を排し，先達による過去20年間の経験に学ぶことが肝要，との彼なりの深慮が働いていた。[23] そのため大学拡張の具体化は，彼の帰国を待って同年11月から始められることになる。

構想によれば，大学拡張組織は行政，試験，図書館，博物館を所管する州大学（管理）機構に第5の部局として新設される大学拡張部局（Extension Department）と，地方センター（local center）とで構成される。ここには，中央と地方をリンクする，イギリスの大学拡張システムが継承されていたことが窮われよう。本部は，地方住民に有用な情報と助言を与え，そうして組織された地方センターに対しては，拡張講師とコースの提供のみならず，学習上必要とあらば図書，実験装置を貸与する。また各コースでは所定の講義回数と教育水準が維持されるように，本部は指導と助言を通じて地方センターを監督する権限を留保する。コース修了者の認定にしても，最終試験の成績（100点満点）に，コース期間中各講義後提出される論文（各10点満点）の評点を合算して，本部が修了証書（credential）を受講生に交付することになっていた。

もっとも，この時点で「大学拡張」が意味するところについて，関係者の間で共通の合意が得られていたかというと，はなはだ疑問である。器は用意されたが，それに盛る中味をめぐる見解の齟齬は，やがてニューヨーク州立大学拡張に越えがたい障碍となって立ちはだかることになる。

Ⅱ 大学拡張運動の系譜（その2）

第二の系譜は，大学拡張がシャトーカを苗床にして，そこで活躍した人びとを介しながら中西部のウィスコンシン，シカゴ両大学に定植されるという文脈で把握することができよう。

シャトーカの名称は，ニューヨーク州西部に所在するシャトーカ湖（Lake Chautauqua）に由来する。オハイオ州アクロンの実業家で敬虔なプロテスタントL．ミラー（Lewis Miller）とメソディスト派日曜学校連盟の事務局長J．H．ビンセント（John H. Vincent）両名の意図は，この風光明媚な湖畔で，日曜学校教師のための夏期講習会を実施することにあった。しかし発足からわずか4年後の1878年には，初期の限定された活動は大幅に拡大され，シャトーカ文理サークル（Chautauqua Literary and Scientific Circle）が成立をみている。そこでは，登録者は，4年間にわたって順次「英国」，「合衆国」，「ヨーロッパ大陸」，「古典」の総合テーマの下に，文学，科学，歴史の広範な領域から毎月一冊の割合で精選した指定図書に基づいて，学習することが計画された。登録者は，自宅での日々の読書と各地の読書サークルでの読書会とで学習を展開する。他方本部との関係でいえば，学習成果の小論文は，毎月本部に郵送し添削をうける通信教育の方法が用いられている。ビンセント自身，文理サークルを，“everyday college”と自認し，[24] また後世M．S．ノールズ（Malcolrn S. Knowles）が「合衆国で初の全国規模で組織された成人教育プログラム」[25] と評価したのは，まさしく文理サークルの性格と規模からして首肯できる。

文理サークルと並行して，シャトーカは，著名人による講演会やコンサートあるいは研修会など各種のインフォーマルな学習機会とともに，フォーマルな学習機会を相ついで発展させた。リベラルアーツ・カレッジをはじめ，言語，神学，図書館司書養成，家政，体育等に関する夏期学校がそれである。[26]

しかしそこでの教育が，諸大学から参集した教師たちによって担当されたという点で，夏期学校は，大学と民衆を組織的に結ぼうとするスキームを先導するものであった。かくしてシャトーカ湖畔は，夏季のみであったが，さながら知的遊園地さらにいえば学堂の盛観を呈した。

シャトーカにおける大学拡張は，ビンセントの発意による。1880年時にはさして留意しなかった大学拡張であったが，6年後の2度目の訪英では，その著しい発展に瞠目し，彼はシャトーカでの実施を決意したといわれる。[27] そして彼は，1888年の夏に，シャトーカ夏期学校で重責を担っていたW．R．ハーパー（William Rainey Harper），R．T．イリー（Richand T. Ely），F．スター（Frederick Starr）とアダムスの4名をメンバーとする委員会に，具体的な検討を諮問している。同年9月15日に公刊されたシャトーカ大学拡張要綱によると，シャトーカ本部とシャトーカ地方支部を機構上の中軸にすえた以外，それは，イギリス大学拡張のパターンを忠実に踏襲したものであった。[28] しかし夏期学校ゆえのシャトーカにとって，大学拡張の運営となると，もとより限界があった。その意味において，構外活動の洗礼をうけた大学人のその後の動勢こそ注目に値する。

イリー[29]が，マディソンの新学科長に招聘された1892年には，ウィスコンシン大学における大学拡張は2年目を迎えようとしていた。T．C．チェンバレン（Thomas C. Chamberlin）学長は，1889年度の報告書で，イギリスモデルに基づく大学拡張の実施を唱導し，また翌年の州教師協会に対する演説では，農民講習会（Farmers' Institute）と対比させつつ，教養的な拡張教育（cultural extension）の可能性を論じて，賛同を求めている。[30] これら一連の活動は，チェンバレン自身イギリス大学拡張に少なからぬ関心を寄せていたことを証左する。ウィスコンシン大学で大学拡張が創始されるにいたった功績は，もうひとりの人物F．J．ターナー（Frederick Jackson Turner）に帰されるであろう。フロンティア学説でその名をとどめるターナーは，1890年ジョンズ・ホプキンズ大学で博士号を取得した後，母校のウィスコンシン大学の教授団に加わっていた。付言すれば，アダムスの指導を受けたという点で彼はイリーと同門で，彼にとってイリーは先輩にあたる。

一般に大学拡張を創始するにあたっては，予め市民の意識を啓発し，新事業への支持をとりつけるためのいわば地均は欠かせない。さもなければベミスがキャントンで担当したコースのように失敗は火をみるより明らかである。[31] 州教師協会でのチェンバレン学長による演説は，上記の意図に沿うものであった。その2週間後の12月29日には，州歴史協会で開催した市民集会にアダムスを招いて，大学拡張に関する講演が行われている。[32] その一方で，チェンバレンは，大学理事会に大学拡張の価値を認識させねばならなかった。それが達成されるのは1891年春のことである。しかし，大学拡張は，多くの例にもれず，独自の予算もスタッフももたなかった。

1891年12月末時の報告によると，初年度には教授団メンバーのうち10名が，40都市の47センターで拡張講義コースを実施している。[33] だが理事会は，大学における正規の職務に支障をきたすおそれのないかぎり構外教育の担当を許可する，との条件を課していた。したがって必然的にそれらコースの開講は，地理的にマディソンから近隣地域に制約されたばかりか，時間的にも金曜と土曜の夜に限られた。[34] いずれもコースは6講義からなり，1コースあたりの受講生数は，175人と算定されている。そのうち講義要目に記載された関連文献を読んだ受講生は全体の2割に満たず，課題論文を提出した割合は，さらに少ない。講義終了後のクラスには，引き続いて多くの参加がみられたものの，そこでの積極的な発言はごく一部の者に限られた。そのため早くもこの時点で，課題論文の廃止，クラス参加者の厳選が検討

されている。[35]

だがそれにもまして，特別スタッフを補充する必要性は緊急を要した。大学拡張の要求に応じようとすれば，教師の負担は必然的に増大する。かといって，補充するスタッフの資質も不問にするわけにはいかない。「大学拡張」の本義に鑑みて，そのスタッフは拡張教育のみならず，正規の大学教育をも同時に担当しうる，若くて有能な人物でなくてはならない。[36] 経歴および実績に照らして，イリーはまさに適任であった。実際，大学拡張を推進する目的から，自らの門下生F．W．スペアズ（Frederik W. Speirs）とし，P．パウェル（Lyman P. Powell）の両名を伴って赴任地に来着した事実は，イリーの意欲のほどを窺わせる。

シャトーカを起点にした大学拡張運動の系譜において，ウィスコンシン大学へ向かう流れはむしろ分流にすぎない。本流は，シカゴ大学へと注ぎ込んだ。[37]

シカゴ大学は，J．D．ロックフェラー（J．D．Rockefeller）の財政的バックアップを得て，1892年に開学したバプティスト宗派系の大学である。ハーパーの新構想大学の特徴は，単科大学の設立を予定していた当局の意に反して，研究機能を重視した総合大学であったこと，そして大学の機能を，四方が壁で囲まれた中庭から開放した点に見出すことができよう。チャーターが州から付与されるかぎり，大学は公共機関であると論じる彼は，民衆の生活のあらゆる側面にかかわりをもつ「民衆のための大学」の在り方を強く志向した。[38] これにしたがえば，研究機能は，人びとが直面する諸問題の解決に資する有用なリソースの創造を意味し，そうして開発されたリソースを広く民衆にもたらす部門が大学拡張部局と大学出版部局にほかならない。[39] わけても大学拡張は，何らかの理由で大学教育に恵まれないでいる人びとにその機会を保障するチャンネルとして，大学が負うべき正当かつ必須の「義務」と彼はみなした。[40] ハーパーにとって，研究とサービスの両機能は調和しうるものであった。

マスタープランによると，大学拡張部局は6つの下部組織で構成されている。講義教育部門（Department of Lecture－study），クラス教育部門（Department of Class－study），通信教育部門（Department of Correspondence－teaching）と，それら3部門が行う拡張教育を補助推進するための試験（Department of Examination），図書・出版（Department of Library and Publication），地区組織振興および拡張教育スタッフの養成（Department of District Organization and Training）の各部門である。[41] 6部門は各一人の専任スタッフの管理下に置かれ，さらにそれら6部門を部局長が統轄する。そして受講生は，コース終了後，大学本部で行われる試験に合格すれば，B．A．取得に要する総単位数の1/2，Ph．D．の場合には1/3までを構外教育によって履習可能とされた。[42] とはいえ，3つの教育部門は，基本的な性格を異にしていた点を看過してはならない。すなわちクラス教育と通信教育の2部門については，開講場所が学外であるとの一点を除けば，正規の大学教育と変わるところはなかった。前者は，シカゴ市内と近郊のセンターですくなくとも週1回夕方か夜あるいは土曜日の午後，大学教師が構内で行っている教育を学外者に提供することを企図している。こうした機会を一層広範囲にしようとしたのが通信教育部門であった。ところが講義教育部門の目的は，「大学の教室で行われているのと同じ教育を一般大衆に提供するのではなく，むしろ文学，歴史，科学の諸領域での読書や学習を刺激し，指導すること」[43] にあった。つまりハーパー学長は，講義教育に，他の2部門へ接続する導入的な役割を担せることによって，系統的な構外教育システムの確立を意図していたと理解してよかろう。

Ⅲ 大学拡張運動の系譜（その3）

19世紀大学拡張の第3の系譜は，アメリカ大学拡張協会（American Society for the Extension of University Teaching）を母体とする。いくつかの機関が90年代の初期に大学拡張に着手したが，たとえばシカゴ大学とウィスコンシン大学の間にみられたように，拡張事業の実施主体が互いに対抗意識を時としてあからさまにすることはあっても，拡張事業の推進という面で双方が協同することは皆無に等しかった。このように個々の機関の組織が相互の連帯を欠き，屹立した状態にあっては，運動の担い手とはなりえない。そうした視点に立つなら，アメリカ大学拡張協会は，この期における大学拡張運動の基軸をなしたとしても過言ではなかろう。

アメリカ大学拡張協会は，1890年6月に結成をみたフィラデルフィア大学拡張協会を前身とする任意団体である。フィラデルフィア協会の歴史は，ペンシルベニア大学の総長W．ペパー（William Pepper）の発意によって，1889年晩秋に開幕する。あのB．フランクリン（Benjamin Franklin）の再来と謳れたペパーは，まず市内のボールドウィン鉄道会社が所有する会館で大学拡張の意義を幾人かに訴え，感触を得た後に，今度は自ら主催する昼食会において大学拡張を議題にのぼせている。そこでは，H．ジェイン（Horace Jane），J．B．レオナルド（James B. Leonard）など，ペンシルベニア大学関係者とフィラデルフィアの名士たちとともに，ケンブリッジ大学の著名な拡張講師R.G．モウルトン（Richard G. Moulton）の顔があった。[44] 往年のライシャムの末裔であるレッドパース講師斡旋事務所（Redpath Lecture Burean）の招きでボストンに逗留中の彼を，ペパーが招待したことによる。イギリス大学拡張に関するモウルトンの講演が，出席者たちの，当市での先導的試行に対する意欲をいかにそそるものであったかは，その後の動向から容易に理解されよう。

年が明けて2月，ペパー宅の夕食会で合意された大学拡張実施案は，同年6月2日にペンクラブでの会合において最終的な承認を経て，いよいよ本格的な組織化のための作業が進められることになる。その結果，フィラデルフィア協会は，40人の名士を構成メンバーとする総会（general committee）と10人の代表委員を擁する執行委員会（executive commitee）および会長，会計，事務局長各一人からなる組織を有した。[45] そして会長にはペパーが選任され，会計，事務局長にはF．B．マイルズ（Frederick B. Miles）とG．ヘンダーソン（George Henderson）が就任している。

協会にとって当面する次なる課題は，事業運営上の要諦となる，講師の確保とイギリス大学拡張に精通するための詳細な研究であった。第一の課題は，近隣の諸大学との交渉を通じて，解決が図られている。すなわちペンシルベニア，リーハイ，ブライアン・モール，スワスモア，ハヴァフォード，フランクリン・マーシャル，ラファイエットの各大学とジェファーソン医科大から，講師提供の言質をとりつけるのに成功した。他方，第二の課題については，6月の総会で視察旅費として寄付を募り，その資金でもって夏には事務局長のヘンダーソンをイギリスに派遣している。帰国後，彼が執行委員会に提出した報告書は，「イギリス大学拡張運動に関する報告書」と題する。[46] それは，32頁からなり，「すでに赫々たる功績を誌してきた」イギリス大学拡張の全貌が11の細目別に記述されている。そこでヘンダーソンは，イギリス人のひそみにならって，大学拡張をこれまで少数者の特権とされていた体系的な知識と教養（Liberal culture）を，その恩恵に浴することができないでいる人びとにもたらそうとする逍遥大学と定義している。この報告書こそ，イギリス大学拡張の全体像を合衆国に紹介した最初の文書であった。

いよいよ1890年11月19日の夜，フィラデルフィア協会は，市内のＹＭＣＡ会館に参集した約200人の一般市民を対象にして大学拡張の意義と同協会の趣旨を公開している。この種の市民集会の目的が，大学拡張への理解と支援，そして同時に大学拡張に対するニーズの創造にあることは言うをまたない。ペーパーの開会の辞に続いて，アダムス，プリンストン大学長Ｆ．パットン（Francis Patton），ドレクセル・インスティチュートのＪ．マクアリスター（James Macalister）がいれかわり演壇に立っている。しかしイギリス人モウルトンの主張は，輝しい実績と重なりあって，とりわけ光彩を放った。彼は，まず大学拡張を，巡回講義システムに基づいて組織された，全国民のための大学教育と定義する。[48] そこから人事（human affairs）に参与しうる対象の拡大という点で，この新しい運動に，宗教改革，政治改革に匹敵する歴史的意味を付与した。彼がいかに聴衆を魅了することに意を用いていたかは，とかく一般市民には無味乾燥な話題となりやすい運営の諸側面についても，たえず自国での事例を引きながら語っていることから窺い知れる。そして最後に資金調達の問題をとり上げ，モウルトンは，大学拡張を宗教運動にたとえながら，それは市民の伝道熱（Missionary zeal）によって支えられねばならぬことを強調している。受講券の販売収入をよすがとする独立採算制の陥穽を熟知してのことである。富裕な市民からの寄付は拡張事業に安定した財政基盤を保証する確実な方策であった。だが，この所説をそうした実際的な問題解決の側面からのみ捉えようとするなら一面的な理解に堕してしまうであろう。なぜなら，伝道精神（Missionary spirit）を文化の中に浸潤せしめる，まさしくそのことを，彼は大学拡張の究極的な目的に掲げていたからである。より安価に大学教育をより多くの人びとに保障するという点において，寄付行為は，伝道精神の最も有効な発現のしかたであった。

聴衆を鼓舞したモウルトンの演説と新聞紙上での広報活動は，たちまち大きな反響をよび，フィラデルフィア郊外のラクスバーで組織されたセンターでは11月３日から化学のコースが開講されている。ところでヘンダーソンは，先の報告書中，フィラデルフィアで大学拡張を創始する際，熟慮を要する問題として，初年度の事業規模に言及している。最初から市全体を包摂しようとすれば，失敗は必定であろう。したがって初年度は，将来性の高い地域，数か所において事業を組織し，周到に事業規模を拡大することを提言した。[49] しかし実際には，反響の大きさから，半径50マイル以内に６センターを設置しようとしていた当初の計画は修正を余儀なくされている。すなわち1890年末には，合計23センターが組織され，そのうち市内に所在したのはわずか９センターで，しかも６センターは，ニュージャージー，デラウェア，コネチカットといった他州にも広く分散した。[50]

協会の年次報告書によると，[51] 初年度には，文学（19コース）と歴史（８）を中心に天文学（１），化学（４），心理学（１），生物学（１），植物学（１），電気（２），代数（１），数学（１），動物学（１）の合計43コースが提供されている。これらコースの大半は，６講義からなる。そして60,573人を数えた受講生総数は，ロンドン大学拡張協会が16年間を要した成果を，フィラデルフィアではわずか１年のうちに達成した，[52] と関係者に豪語させるに足るものであった。

ペパーが，ペンシルベニア大学ワートン・スクールで経済学を担当する気鋭の教授Ｅ．Ｊ．ジェイムズ（Edmund J. James）に会長の座を委譲した時，協会はすでに全国協会としての道を歩み始めていた。すなわちフィラデルフィア地区での先導的試行は，シーズンの終焉をまたずして，衆目を集めるところとなる。実際，大学拡張に関する情報のみならず，実践上の指導や援助を求める声が各地から寄せられている。[53] しかしそうした要求にことごとく応えることは，一地方協会の能力を越えた。全国を視野にお

さめて大学拡張の振興を図る推進母体の必要性は明白であった。こうした背景で，フィラデルフィア協会は，アメリカ協会へと発展的解消をみている。それは，フィラデルフィア協会結成よりわずか半年後の1890年12月のことである。

全国協会としての具体的な活動のひとつにフィラデルフィア協会発足に先だって，アダムスやモウルトンが市民集会で果たした役割があげられるであろう。たとえば事務局長のヘンダーソンは，1891年5月24日，遠路コロラド州デンバーまで西行し，[54] 同年11月24日にはバージニア州ウィンチェスターに南行した。[55] また会長に就任して間もないジェームズは，1891年5月22日に故郷のイリノイ州に赴き，シカゴ大学拡張協会の結成を促進すべく，基調講演を行っている。[56]

もっとも，広範囲に及ぶ援助活動という面では，協会の刊行物を指摘しておかねばならない。とくに1891年7月に発刊した機関誌『University Extension』は，その紙幅の大半を大学拡張にかかわる論説と実践的な諸側面の解説にあて，大学拡張の普及に与って大いに力があった。さらに協会は，1891年の暮も押し迫った12月29日にフィラデルフィアで，初の「大学拡張に関する全国会議」を主催した。関係者が一堂に会することによって，各地で実施されあるいは着手されつつある大学拡張の情報を交換しあい，一層の発展を期するのがそもそもの目的であった。3日間にわたって開催されたこの会議には，東部諸州はもとより，西はインディアナ，ミネソタ，南はルイジアナなど合計20州から95人の代表が出席している。この会議が，協会の全国的な影響力を不動のものにしたことは疑いえない。それゆえに，というべきであろう，当会議のねらいを邪推する向きを懸念して，名誉会長ペパーは，歓迎の辞で，アメリカ協会には，助言，情報，援助はすすんで提供する用意があるが，他のいかなる組織の活動にも干渉しようとする意志はみじんもないと穏やかに述べ，参会者に同協会の意図をあらためて確信させねばならなかった。

Ⅳ 大学拡張教育の様態

1890年代初期においては，大学拡張の評価はいまだ定まってはいない。大学拡張をめぐる当時の状況は，熱烈な賛同と，澎湃として起こる批判とが混在していた。それだけに，一般に大学は，この運動の価値が明らかになるまで事態を静観する態度をとり，大学拡張と「公式の関係をもつことを差し控えた」。[57] やがて東部における実績とそれに対する民衆の反響，ならびにアメリカ協会による情宣活動の余波をうけて，大学拡張への懐疑の念は漸次融解していった様子が窺える。[58] しかし，それでも，大学が主体的に拡張事業を実施するにはなお相当の懸隔を残していた。

多くの大学が選択したのは，学外において組織された任意団体を通じて間接的に大学拡張にかかわる方式である。[59] 先の全国会議に各地から寄せられた報告は，協会が拡張事業を推進する上で先導的な役割を果たしたことを示している。「大学拡張協会」の名称をもつものだけを拾い出すと合計16，さらに多くの報告が当該州の現状を，組織化は進行中と記していることからみて，実際にはその数を上まわったと考えてよい。

しかし拡張協会は，結成時に大学関係者がイニシアティブをとった時ですら，大学との組織的な関係を確立してはいなかった。アメリカ協会を例にとろう。成立の経緯からして，同協会はペンシルベニア大学に大きく依存していた。ところが大学当局としては，拡張事業への参画や協力は，学内での本務に支障をきたさない範囲内で，教師個人の自由裁量とする方針を堅持し続けた。にもかかわらずペパーを

継いで会長に就任したジェイムズは，週のうち数日，午後には，アメリカ協会事務局に出向き，会長として執務するのを常とした。これについては，大学総長でもあったペパーとの間で暗黙裡に了解があったものと思われる。[60] そのことを裏づけるかのように，1894年にペパーが総長のポストを去るや，アメリカ協会に対するジェイムズの傾倒ぶりは，それまで学内でくすぶっていた大学拡張そのものへの不信と相まって，にわかに激しい反撃にさらされている。解雇通告の理由の一端は，[61] 本務と大学拡張を峻別できなかったジェイムズの勤務態度にあった。

大学との不安定な，おしなべて稀薄な関係は拡張講師の恒常的な不足と同時に，拡張教育の杜撰な運営を招来せしめる原因ともなる。ここで，イギリスのロンドン大学拡張協会と比較してみると，問題の所在はより鮮明になろう。ロンドン協会の場合，オックス・ブリッジとロンドンの3大学の代表で構成される大学合同委員会が，拡張講師と試験官の指名および協会が実施する事業について全般的な監督を行っている。[62] この厳格な措置によって拡張教育は，はじめて大学レベルであることが公的に認知された。それにひきかえ合衆国の拡張協会は，コースを監督する機構を欠いていたため，拡張教育の質を維持するに不可欠の歯止めをもたなかった。また，独立採算制では，寄付と受講券の販売収入に頼らざるをえない。しかし期待できる寄付に限りがあるとすれば，必然的に事業の存続は，受講生の数にまつほかはない。これを先の問題と考えあわせるなら，協会と民衆の力関係において，後者が前者を凌駕することを意味した。つまり協会主導型の大学拡張は，拡張事業を考える基本的視座が質から量へと移行しやすい体質を胚胎していたといえるだろう。

大学拡張が批判を誘うのは，この点である。たとえばA. B. ハート（Albert B. Hart）は，拡張する大学をもたず喇叭で民衆を幻惑する運動だと大学拡張を酷評した。[63] そうした批判に応え，ジェイムズは，大学拡張教育と大学教育に初めて一線を画した。すなわち「いくつもの拡張講義コースに出席することで，民衆は，大学の恩恵に浴する機会を与えられるなどと，不合理な主張をしたおぼえはない」と語気強く反論する。ジェイムズのいうところにしたがえば，大学拡張の目的は，「学者（scholar）の養成ではなく，むしろ学問の修得へと受講生を促し，彼らを学問の大道に就かせ，正しい方向へと導くこと」にある。そこで彼は，大学拡張を教育（instruction）の使命を負う大学に対峙させ，自己修養（self culture）の概念から，高次の価値あるもの（higher things）に向けて民衆を知的に啓発する（inspire）役割を強調した。[64]

拡張協会を過渡期的な初期形態とすれば，[65] 大学主導型の運営形態は到達点とみなされる。しかしながら，たとえ大学が自己の領分に大学拡張を包含した場合でも，ウィスコンシン大学のように，大学拡張の脆弱な基盤は後に禍根を残した。大学拡張が独自の専任スタッフをもっていなかったことは，第2章で述べた通りである。その意味で大学当局の対応は，ペンシルベニア大学の例を彷彿させる。2大学間に違いがあるとすれば，ウィスコンシン大学が大学拡張に好意的に臨んだという一点に尽きるだろう。

ウィスコンシン大学の方針に鑑みて，優先すべきは学内活動にあり，大学拡張は，本務を前提にした付加的な活動でしかない。しかも，アメリカ協会の傘下で，年間2万マイルにも及ぶ旅程を講義しながら移動したW. C. ロビンソン（William C. Robinson）[66] ほどではなかったにしても，授業と研究活動に加えて拡張教育を担当することは，教師に過重な負担を強いた。[67] そのため当初には，学内の著名な教授たち10人が拡張講師陣に名を連ねたが，彼らの大半は早々に拡張事業から手を引き，本務に籠ってしまった。[68]

拡張講師の確保に恒常的に悩まされただけでなく，管理機構の不備から拡張教育に変質をきたしたという点で，ウィスコンシン大学拡張は，アメリカ協会の場合と酷似する。ともに，民衆の側での気まぐれな興味と持続的な関心を識別できないまま，彼らに迎合する傾向がみられた。本来受講生の負担を軽減する意図でもって暫定的に始められた6講義コースは，90年代大学拡張の主流を占めている。12講義コースに延長することは望めなかったばかりか，逆に講義コースは短縮する傾向さえ窮われる。またクラスへの出席率，ましてや課題論文の提出率ともなれば，きわめて低い。[69] 民衆の要求を創造する必要性を説いた教訓は，[70] ついに顧慮されることはなかった。かくして大学拡張は，民衆にとって軽便な通俗教育へと堕し，ジェイムズが主張したとは別の次元で大学教育との本質的な差異をいよいよ浮き上がらせる結果を招いている。ためにこの種の大学拡張は，民衆の生活との関連性に乏しく，[71] 一時的流行（fad）が過ぎ去るとライシャム・コースの磋跌を踏む宿命にあった。

では，大学拡張の大学機構への統合を試みたシカゴとニューヨークの場合はどうであったか。シカゴ大学の場合，拡張講師の陣容は，授業時数のすくなくとも半分を，構外教育に充当する大学拡張教授団を中心に，随時構外教育を担当する大学教授団，外来講師，大学院生（ただし指導教授の認定を要する）で構成される。[72] この布陣には「学者狩り」によって獲得したベミス，モウルトン，ヘンダーソン，ジェイムズも含まれている。そして拡張教育は，直接大学本部の監督下におかれた。したがって拡張講師は担当コースに関して，事前に当該学部，学科長の承認を受けることが義務づけられている。コース修了時の最終試験も，本部の所管事項とされた。

しかし大学に統合された場合もまた，大学拡張は批判と無縁ではありえなかった。ただし，それらの批判は，“大学の威信”を論拠にした点で，大学との密接な提携を欠いたがゆえに協会主導型大学拡張に向けられた批判とは基調を異にする。

シカゴ大学拡張に対する批判は，J. S. ローリン（J. S. Laughlin）とW. G. ヘイル（W. G. Hale）の2教授によって口火を切られた。彼らは，コーネル大学からシカゴへの赴任が決定した時に，大学拡張構想を初めて耳にしている。連続5回に渡る面談の中で，ハーパーがそうした構想には一言も触れなかったことを遺憾としつつ，ローリンはシカゴ大学が大学拡張を行うことに強い反対を表明した。[73] 他方，ヘイルは，ハーパーへの私信で「提案された計画は，シカゴ大学の最善の発展からみて，好ましいものとは思えない」[74] と異議を唱えた。さらにA. W. ムーア（A. W. Moore）は，ハーパーが，大学拡張の意義と必要性を主張した論文中「大学が大学拡張をどの程度行うかは，いまだ合意に達していない」[75] と述べた一文を受けて，「一体大学は，大学拡張をどこでやめるのか」[76] と切り返した。そして，もし拡張教育が構内での教育より優れているかあるいは同等であるなら，なぜ大学は，拡張教育に関係するもの以外の構内諸施設を取り壊してしまわないのか，と続ける。

ニューヨークの大学拡張構想を指弾した人びとの論調もこれと軌を一にする。デューイの意図は，拡張講義コースのユニットに基づいて，初等から大学院にいたる多様なレベルの教育を拡張することにあった。拡張教育に学位取得の機会を開くことは，主たる関心事ではなかったといわれる。にもかかわらず1891年，高等教育委員会は，前年に作成された大学拡張計画をさらにふくらませ，無料で拡張講義コースを開設するとともに，B. A.，M. A.，Ph. D. 取得の可能性を開く，大胆な試案を提示した。P. セクストン（Pliny Sexton）をはじめとする人びとには，学位取得の可能性によって，大学拡張は既存の大学と競合し，ひいては大学の存在意義をも失わせる元凶と映じた。結局，1892年の夏の理事会

で，学位授与は一切行わないとの決議がなされたが，問題は，そうした反動勢力の台頭によって，大学拡張計画の原案までも否定されたことであろう。つまり大学拡張は，通俗講義と同義に解されるところまで大きく後退してしまった。1891年末の全国大学拡張会議で，ニューヨーク大学拡張計画を誇示したデューイであっただけに失望も大きく，骨抜にされた事業のために，再び1万ドルの補助金支出を州議会に要請することはなかった。[77]

他方，シカゴ大学では，1895年に当初の規定が改定され，大学拡張で修得可能な単位はB.A.学位取得に要するもののうち1/3に減じられた。ただしこれはクラス教育と通信教育の2部門にのみ適用されている。講義教育部門については，これを機に，単位認定の規定は削除された。批判者たちが，大学教育とは性格が異なる講義教育に大学の単位を付与することを認めるべくもなかった。その後における3部門の消長はいよいよ特徴的である。クラス教育と通信教育の2部門は存続したが，講義教育部門は，1911年に廃止のやむなきにいたっている。

以上みてきたように，協会主導型の運営形態をとった時と，大学が自ら拡張事業の実施主体となった時とでは，さらに後者の場合にもそれぞれの大学によって，大学拡張教育の様態は相違した。かかる差異を惹起せしめた理由のひとつは，イギリス大学拡張の受容に際して必然的に生起する外国文化の翻訳の問題にかかわる。訪英を終えたヘンダーソンは，「報告書」で，大学拡張の目的について，「地域内の貧困者や多忙な人びとの手の届く範囲内に，学問に通暁した教師によるすぐれた教育をもたらすこと」「少数者の特権であった体系的な知識と教養の機会を，これまでその恩恵にあずかれないでいた人びとに提供すること」[78]と要約している。それを受けてアメリカ協会は，大学が正規の学生たちに行っていることのうちいかほどのものを，大学に出席できないでいる人びとのためになしうるか，との問題を解決しようとする試みこそ，大学拡張にほかならない，とくりかえした。[79] いずれにしても，イギリスでの定見を祖述したにすぎない。それゆえに「大学拡張」の名辞を冠したスキームが具体的には何を含意するのか，ここ合衆国においてあらためて検討されねばならなかった。

しかし一般的にいって定義の抽象度が高くなればそれだけ，多義的な解釈はさけがたいものとなる。大学拡張も例外ではなかった。たとえば，協会主導型大学拡張に「拡張すべき大学をもたぬ無謀な企図」と痛罵を浴びせ，そこから拡張教育を羊頭狗肉と論難した時，批判者たちは「大学拡張」を正規の大学教育そのものの時間的，地理的拡張（extension of university teaching）と同一視していたことは明らかである。皮肉にもそれが90年代初期，民衆の間に大学拡張への熱狂を喚起せしめた主たる要因でもあった。いまだ大学拡張の意味するところは曖昧模湖とした状況下で，それまで大学教育の埒外におかれていた人びとが，大学拡張の呼称に幻惑され，あるいはまた運動を主導する大学拡張協会（societies for the extension of university teaching）の字面をよすがにして「大学拡張」の何たるかを推し量ったとしても不思議ではなかろう。

これに対してもうひとつの解釈は，アメリカ協会第二代会長ジェイムズに代表される。ここで当時のアメリカ社会に目をやると，ダーウィニズムを拠に「富の福音」思想に結晶した個人主義の原理によって，国家経済は飛躍的な発展をとげつつあった。しかし反面，レッセ・フェールの下で無限定の自由競争を正当化したあまり，政治的腐敗，経済的不公正と蔓延する社会悪にアメリカ社会は病まねばならなかった。それは，とりもなおさず民主主義の危機を意味する。疲弊した民主主義を救う道は，世論と民心の教育しかない，革新主義の思想家たちは，このように判断を下した。したがってジェイムズが大学

拡張に託したのは，自己修養の教義であり，高次の価値あるものに対する民衆の知的啓発であった。換言すれば大学拡張教育には，大学教育の代替物ではなく，大学に集積された教育ソリースを，民衆のニーズに基づいて噛み砕き，彼らが生活する学外に運び出すことが期待された。すくなくともその意図において，この種の教育は，シャノンら（T. J. Shannon and C. A. Schoenfeld）が「機能的拡張（functional extension）」[80]と命名したものに相当する。

じつに，90年代大学拡張教育の様態は，多義に翻訳された「大学拡張」が一方に存在し，それに個々の大学がいかなる姿態をもって対応しようとしたか，という構図の中で捕捉することができよう。もとよりデューイにしてもハーパーにしても，「大学教育の拡張」と「機能的拡張」の双方を包摂する拡張事業を構想していた。にもかかわらずそれら斬新な目論見が学内の伝統主義者たちによる批判を経て帰結したものは，両大学間できわだった対比をみせたことは注目に値する。すなわちニューヨーク州立大学の場合，セクストンを筆頭に批判勢力は，大学拡張が正規の大学教育と競合することを懸念した。彼らにしてみれば，そうした事態は，大学の威信を損うものでしかなかった。ここから大学教育の時，空間的拡張は，原案から早々に撤回することを強固に要求した。ところがシカゴ大学では，同じく大学の威信にこだわりながらも，批判は，大学教育とは質的に異なる教育を大学が実施することに集中する。「大学教育の拡張」を目的とするクラス教育および通信教育の両部門が存続したにもかかわらず，「機能的拡張」を意図した講義教育部門は廃止された事実が，そのことを実証している。

最後にウィスコンシン大学の場合に言及しておこう。興味深いことに，資料の許す範囲でみるかぎり，同大学では，大学拡張批判は，ニューヨーク州立大学やシカゴ大学ほど顕在化していない。この理由は，制度化という面で，他の2大学の事例に比較してウィスコンシン大学の当事者たちが，大学拡張を公式に大学機構に統合しようとする明白かつ強力な意図を有してはいなかったという事実を想起すれば足りるであろう。しかしすでに指摘したごとく，大学拡張をめぐる学内での位置づけおよび組織の脆弱さは，拡張講義コースを担当する教師に過度の負担を強いたばかりか，拡張教育を監督する機能を欠いたために，90年代におけるウィスコンシン大学拡張の帰趨は，協会主導型大学拡張が辿ったそれと酷似した。

大学拡張への懐疑はいうにおよばず，大学が積極的に拡張事業に着手した時ですら，概して彼らは，いまだ既成の大学観に固執し，その枠組でもって大学拡張をとらえようとした点で，いみじくも共通する。その意味では，多様な内容とよりフレキシブルな学習方法，形態をあわせもつアメリカ合衆国に固有の大学拡張が，教育，研究と相並らぶ第三の機能として大学に定着するには，大学観の転換を必要とした。それは，知的革命のパターンにおいて，ランドールが第四のグループにあげた変革者たち（transformers）の出現を待たねばならなかった。

<注>

Abbreviation

PNC: The Proceedings of the First Annual Meeting of the National Conference on University Extension, 1892.

1) John Herman Randall, Jr., *Philosophy After Darwin: Chapters for the Career of Philosophy Volume III, and Other Essays*, Columbia University Press, New York, 1977, pp.30—52.
2) Herbert B. Adams, "Seminary Libraries and University Extension", in *Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science*, Johns Hopkins University, Baltimore, 1887.
3) *Ibid.*, p.29.
4) *Ibid.*, p.31.
5) *Ibid.*, p.32.
6) Malcolm S. Knowles, *A History of the Adult Education Movement in the United States*, New York, 1977, p.51.
7) Herbert B. Adams, *op. cit.*, p.21.
8) アダムスは，大学拡張について，それはgood classをめざしているのであって，mass meetingをめざしているのではないと述べている。彼は，講義後のクラスをゼミナールと同一視していたことが窺える。
   Herbert B. AdaMS, "University Extension in America." in *The Forum*, Vol. XI, July, 1891, p.513.
9) "Proceeding of Fabyan House Conference, Sep. 8—11, 1890." in *The Library Journal*, Vol. 15, no. 12, 1890. pp.118—22.
10) Edward W. Bemis, "Reminiscences of the Earliest University Extension in The United States." in *University Extension World*, Vol. 2, p.172.
11) Josephus Nelson Larned, "An Experiment in University Extension." in *Library Journal*, Vol 13, no. 3—4, 1888, p.75.
12) *Ibid.*
13) *Ibid.*
14) デューイは，17歳の時，自らの一生を教育，とくに民衆のための高等教育に献げようと決意を日記に誌している。
   Frank C. Abbott, *Government Policy and Higher Education: A Study of the University of the State of New York, 1784—1949*, Cornell University Press, New York, 1958, p.273.
15) Melvil Dewey, "University Extension in New York." in *PNC*, p.273.
16) Herbert B. Adams, "Seminary Libraries and University Extension." in *Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science*, Johns Hopkins University, Baltimore, 1887, pp.25—26.
17) Melvil Dewey, op. cit., p.273.
18) *Ibid.*, pp.269—70.
19) *Ibid.*, p.271.
   Frank C. Abbott, *op. cit.*, p.65.

20) Frank C. Abbott, *op. cit.*, pp.72—76.

21) *Ibid.*, p.337.

22) この1万ドルの使途は，拡張事業の創始に要する経費に限られていた。拡張講師への謝金等実際の運営経費は，寄付と受講券収入でまかなうよう規定されている。
Melvil Dewey, *op. cit.*, pp.274—75.

23) *Ibid.*, p.274.

24) John H. Vincent, *The Chautauqua Movement*, New York, 1885 (Reprinted 1971).

25) Malcolm S. Knowles, *op. cit.*, p.37.

26) John H. Vincent, *op, cit.*

27) Herbert B. Adams, "University Extension and Its Leaders," in *The Review of Reviews*, Vol.III, no.18, 1891, p.602.

28) イギリス大学拡張はシャトーカでアメリカナイズされたと指摘するのはクリースである。
Ibid. James Creese, *The Extension of University Teaching*, New York, 1941.

29) イリーと大学拡張との関係は，ソーシャル・ゴスペルの視点からも検討する必要がある。

30) Merle Curti and Vernon Carstensen, *The University of Wisconsin, A History 1848—1925*, University of Wisconsin Press, 1949, I in two Volumes, pp.715—20.

31) Edward W. Bemis, op. cit., Herbert b. Adams, "University Extension in America.," in *The Forum* Vol. XI, 1891.

32) 演題は "The Higher Education of the People" であった。
Frederick J. Turner, "The Extension Work of the University of Wisconsin," in *Handbook of University Extension*, 1892, p.316.

33) 初年度の講師のコース名は以下のようである。(　) 内はコースを開講したセンター数を示す。
Prof. F. J. Turner: america History, Colonization (8)
Prof. J. C. Freeman: English Literature (17)
Prof. J. E. Olson: Scandinavian Literature (2)
Prof. L. F. VanCleef: Greek Literature
Prof. J. B. Parkinson: Economics (3)
Prof. H. C. Tolman: The Antiquities of India and Iran
Prof. E. A. Birge: Bacteriology (6)
Prof. C. R. Barnes: Physiology of Plants (2)
Prof. H. B. Loomis: Electricity (2)
Prof. R. D. Salisbury: Landscape Geology (7)

34) Edward A. Birge, "University Extension in Wisconsin," in *PNC*, p.319.
Frederick J. Turner, op. cit., p.319.

35) Frederick J. Turner, op. cit., p.318.

36) *Ibid.*, p.322.

37) シカゴ大学が，いかにシャトーカの影響下で構想されたかについては，次の文献が参考になる。

Joseph E. Gould, *The Chautauqua Movement: An Episode in the Continuing American Revolution*, State University of New York Press, 1961.

38) William Rainey Harper, "The University and Democracy," in *Cosmopolitan*, 26, 1899, p.8.

39) ハーパーのマスタープランでは，①プロフェショナル・スクール，カレッジ，アカデミーを含む，ユニバーシティ・プロパー，②大学拡張，③大学出版，④大学図書館及び研究所，⑤ユニバーシティ・アフィリエーションの5部局からなる大学が構想されている。
The University of Chicago, *Official Bulletin*, No. 1, 1891, p.3. The University of Chicago, *Annual Register*, July 1, 1892- July, 1, 1893, pp.173—197.

40) *Official Bulletin*, No. 6, 1892, p.2.
William R. Harper, "Convocation Address," 1893, p.2.

41) *Offical Bulletin*, No. 6, 1892.

42) *Annual register*, 1892—1893, 1893, p.189, p.193, pp.195—96.

43) *Ibid.*, p.175.

44) Francis No. Thorpe, *The Life of William Pepper*, Philadelphia, 1904, pp.385—86.

45) *Ibid.*, p.386.

46) George Henderson, *Report upon the University Extension Movement in England*, 1890.

47) Francis N. Thorpe, *op. cit.*, p.387.

48) "Address of Richard G. Moulton, A. M., of Cambridge, England, on the University Extension Movement." (Delivered before the American Society for the Extension of University Teaching, November 19th, 1890).

49) George Henderson, *op. cit.*, p.12.

50) "The Report of the American Society for the Extension of University Teaching, November 3- December 31, 1891," 1892.

51) *Ibid.*

52) "The History of a Branch Society." in *Handbook of University Extension*, 1893, p.19.

53) Ibid., pp.18—19.

54) "Report on University Extension in Colorado," in *PNC*, p.216.

55) "Report on University Extension in Veiginia," in *PNC*, p.169.

56) "Report on University Extension in Illinois," in *PNC*, p.194.

57) H. P. Judson, "Report on University Extension in Minnesota," in *PNC*, p.203.

58) W. Boughton, "University Extension in Ohio," in *University Extension*, Vol 3, no. 12, 1894, p.6.

59) 「大学拡張に関心をもつ，州立大学の教師たちは，大学拡張システムとして任意団体を組織するのが最善の措置と考える」
"Report on University Extension West Virginia," in *PNC*, p.171.

60) Richard A. Swanson, Edmund J. James, 1855—1925: A Conservative Progressive in American Higher Education, 1966, pp.120—24.

61) *Ibid.*

62) George Henderson, op. cit., pp.7—8.

63) Albert B. Hart, "University Participation: A Substitute for University Extension," in *Educational Review*, 6, 1893.

64) Edmund J. James, "A Common Misconception Regarding University Extension," in *University Extension*, Vol. 2, no. 12, 1893, pp.282—83.

65) 拡張協会を過渡期的な運営形態とみなす理由は，以下のような事実に依る。近在の諸大学が大学拡張に消極的で，主体的には拡張事業に着手しようとはしなかった地域において，拡張協会が結成され，活動した。しかしそのうちにシカゴ大学のように強力な大学が拡張事業を開始すると，シカゴ協会は存在意義を失い，シカゴ大学拡張の地方組織に編入されている。

66) William C. Robinson, "The Circuit" in *University Extension*, Vol. 1, no. 11, 1892, pp.244—50.

67) Frederick J. Turner, op. cit., pp.320—24.

68) ターナー自身，構外事業に伴う疲労を訴えるとともに，研究に専念できる時間を求め，来年度からは大学拡張から身を引きたいと，アダムスへの私信（1892年1月18日）で述べている。
Frederick M. Resentreter, *The Boundaries of the Campus: A History of the University of Wisconsin Extension Division, 1885—1945*, The University of Wisconsin Press, 1957. pp.59—60.

69) The American Society for the Extension of University Teaching, "Ten Years' Report of the American Society for the Extension of University Teaching, 1890—1900," 1901.

70) George Henderson, op. cit., p.5.

71) Frederick M. Resentreter, op. cit., pp.39—42.

72) The University of Chicago, *Official Bulletin*, No. 6, 1892, p.5.

73) Thomas W. Goodspeed, *A History of the University of Chicago: The First Quarter-Century*, 1916 (Reprinted 1972), p.139.

74) W. G. Hale to W. R. Harper, Feb. 7, 1892.

75) William R. Harper, "The University Organization in Relation to University Extension.," in *Book News*, 9, 1891, p.343.

76) Addison W. Moore, "Philosophy by Correspondence," in *University Record*, 8, 1903, pp.96—97.

77) Frank C. Abbott, *op. cit.*, pp.62—67.

78) George Henderson, *op. cit.*, p.31.

79) C. Hartley Grattan, *American Ideas about Adult Education 1710—1951*, 1959, p.104.

80) Theodore J. Shannon and Clarence A. Schoenfeld, *University Extension*, 1965.

Some Phases of University Extension in Late 19th Century America

Gengo KOIKE*

This paper aims to examine the beginnings of the university extension movement in America and to place it in its proper setting in the history of university adult education.

Inquiring into the way of how English university extension was accepted by American universities in the late 19th Century, the university extension movement in the 1890's was woven from three threads which run lengthwise. The first of them began when Herbert B. Adams appeared at the convention of the American Library Association at Thousand Islands, New York in 1887, to deliver a speech on "Seminary Libraries and University Extension". Adams persuaded librarians to initiate the extension work in public libraries and led Melvil Dewey to plan a university extension scheme in the University of the State of New York.

The second thread begun at Chautauqua Institution. This institution was founded for the purpose of training Sunday school teachers and by the 1880's had developed the Chautauqua Literary and Scientific Circle as the first integrated core program of adult education on a national scale. In 1886, John H. Vincent after visiting England and being deeply impressed with its adult education was determined to add university extension to his Summer programs. Although it did not work out successfully, this attempt inspired young and vigourous scholars, including William R. Harper and Richard T. Ely, who were connected with educational services in Chautauqua. The advancement of university extension in the Universities of Chicago and Wisconsin was attributed to the very creativeness and evangelistic efforts of the persons connected with Chautauqua Institution.

But on the whole, university authorities were skeptical about university extension. Even if they appreciated the unknown, university staff preferred organizing voluntary societies outside in order to set up extension courses. According to the reports presented to the national conference held in 1891, it was shown that there were no less than 16 societies of this kind in the United States. Among them, the first one established was the American Society for the Extension of University Teaching by provost William Pepper of the University of Pennsylvania and his associates. Through its monthly periodical and other successful accomplishments, this Society had become the most widely known of the experiments in university extension attempted during the 1890's.

Especially for extension societies, it was essential to derive resources from neighboring universities. For example, in the London Society for the Extension of University Teaching in England, a Universities' Joint Board had been formed. It had charge of nominating lecturers and examiners, and thus gave university status to the work of the society. Besides, the existence of this Board had further secured for the Lon-

*Associate Professor, Faculty of Humanities, Fukuoka University

don Society the advantage of a wide choice of lecturers. American societies failed to establish close a relationship with universities as did their English counterparts like the London Society. It was the lack of control which caused the offerings of American societies to turn downwards to popular lectures. The same rule seemed to apply to the case of the University of Wisconsin. On the other hand, another rule seemed to apply for the Universities of Chicago and the State of New York. Harper and Dewey had enthusiastically proposed that university extension should be an integral part of university function. But both of them endured severe criticisms expressed by traditionalists on and off campus. Some opposed outright that university extension would enter into direct competition with university education. Others looked down upon university extension as being detrimental to "university prestige" or "university dignity". Those criticisms, in a sense, stigmatized university extension as a "necessary evil". The results were as follows: In the University of Chicago, everything did not go as Harper had originally planned. In New York, Dewey's ideal would never be brought to realization.